

「新しい豊かさ」に焦点を当てたESD授業開発

－世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」の現地調査を通して－

山方貴順

(奈良市立都跡小学校・大阪教育大学大学院)

中澤静男

(奈良教育大学 教育連携講座)

大西浩明

(奈良市立飛鳥小学校)

祐岡武志

(阪南大学)

河野晋也

(奈良教育大学附属小学校)

ESD lesson development focused on “New wealth”:

Through field survey of Globally Important Agricultural Heritage Systems “Nishi Awa Slanted Farming System”

Takanobu YAMAGATA

(Miato Elementary School・Osaka University of Education graduate school)

Shizuo NAKAZAWA

(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)

Hiroaki ONISHI

(Asuka Elementary School)

Takeshi YUOKA

(Hannan University)

Shinya KOHNO

(Elementary School Attached to Nara University of Education)

要旨：本研究は、新たな教材として世界農業遺産に着目し、主に日本の認定地域を調査・分析することで、その教育的意義をESD（持続可能な開発のための教育）の視点から明らかにした後、ESD教材を開発することを目的とする。本稿は、先行研究で抽出したESD教材開発の視点を活用し、世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」の現地調査から抽出した①地域の持続可能性、②他地域とのつながり、③食料生産・食文化を取り入れた小学5年生社会科小単元「高地の暮らし」における単元展開を提案するものである。

キーワード：世界農業遺産（G I A H S） Globally Important Agricultural Heritage Systems
ESD（持続可能な開発のための教育） Education for Sustainable Development
豊かさ Wealth

1. はじめに

2015年より筆者らは、基盤研究(C)「世界農業遺産のESD教材開発を通じたESDの視点に関する研究」として、世界農業遺産を現地調査し、その教育的意義をESDの視点から明らかにし、授業開発を継続的におこなってきた。

2016年には、祐岡武志らが、熊本県阿蘇地域「阿蘇の草原の維持と持続的農業」と、石川県能登地域の「能登の里山里海」を事例として、世界農業遺産は有効なESD教

材となり得ることを述べた¹⁾。持続可能な社会や、そのための教育であるESD、さらにESDの学習プロセスでは、「つながり（関係性）」、「多様性（多元性）」、「変化への対応（自己変革）」が重要な要素であることを先行研究から述べ、それらの要素がバランス（調和）の取れた状態であることの重要性を説いた。阿蘇と能登の2事例から、先の要素が抽出でき、かつバランスの取れた状態であることを理由に、世界農業遺産はESD教材として適していることを明らかにした。一方で課題として、具体的な教材開発・実践にまで至っていないことを挙げた。

その課題を克服すべく、2018年には世界農業遺産の現地調査から抽出できた教材化の視点を活かした授業開発を含む2つの研究がなされた。第1は、大西浩明らが新潟県佐渡市「トキと共生する佐渡の里山」を事例として、授業開発・実践したものである²⁾。この授業の特徴は、消費者・生産者・環境の3つの立場から「豊かさ」を児童に考えさせた点にある。消費者の立場から考えさせる学習はよく見られる。生産者の立場から考えさせることは、学習指導要領や教科書の検討に加え、佐渡市の現地調査から見えてきた、生産者が豊かにならなければ、食料生産は持続可能性を失う、との考えに基づいている。佐渡市は、この考えを起点とし、その方策として世界農業遺産の認定を目指し、新たな米の販路開拓を狙ったという。これは、先のESD教材における重要な要素の「つながり」や「変化への対応」にあたる。環境の立場から考えさせることも、トキを生物多様性のシンボルとして活用することで、佐渡島全体の持続可能性を高めているとの現地調査に基づいている。生物多様性は、ESD教材における重要な要素である「多様性」にあたる。

第2に、山方貴順らが「清流長良川の鮎」を事例として、授業開発したものである³⁾。この実践の特徴は、現地調査から抽出できた、ブランド化によるメリットを取り上げることで、それは日本が直面している食料問題を解決する一助となり得ることを学習者に考えさせる学習を、単元に位置付けたことである。この学習によって、ブランド化による、経済の活性化（「変化への対応」）、人々がつながる社会（「つながる」）、生物多様性に富む生物環境（「多様性」という、ESD教材における重要な要素を学ぶことができる。

しかし、筆者らの課題として、未だ調査が及んでいないサイトの存在が挙げられる。2018年9月現在、日本国内に11サイトある世界農業遺産のうち、現地調査ができたのは6サイトである⁴⁾。そこで、未調査の5サイトのうち、今年（2018年）認定されたばかりの徳島県にし阿波地域「にし阿波の傾斜地農耕システム」に着目し、現地調査を行うことにした。

本稿では、まず本地域の概要について述べ、次に訪問した調査地における調査結果を明らかにした後、教材化の視点に関する考察を加え、本事例地を教材化する際の先行研究を検討した上で、単元展開を提案することとする。

2. 徳島県三好市祖谷地域の概要

世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」の中心的存在として、徳島県三好市祖谷地域と、そこに位置する落合集落がある。この地域は、徳島県と高知県の県境に位置する、非常に山深いところにある。大歩危・小歩危峡のさらに奥地に位置し、屋島の戦いをはじめとする源平合戦で敗れた平家の落人がこの地域に隠れ住み、平家再興を願ったとの言い伝えが残されている地域である。非常に山深いゆえに、「日本三大秘境」にも選定され、外界から

閉ざされた、独自の文化を有している。本章では、資料及び現地調査から見られた、食料生産と食文化、落合集落の概要について述べる。

2. 1. 本地域に見られる食料生産と食文化

この地域の特徴として、稲作に適さない土地や地質であることが挙げられる⁵⁾。稲作には、当然ながら、水を張ることのできる平らで、水を保つことのできる土地が必要である。そのため、多くの中山間地域や傾斜地では、棚田を作って、稲作をしてきた。しかし、この地域では稲作は行われてこなかった。現在でも、極めて少数の農家しか、稲作を行っていない。それは、この地域の地理的条件や地質に由来する。この地域はあまりに急斜面で、それでいて、水を保ちづらい地質を持つ。加えて、内陸部の高地であることから、1日の寒暖の差が激しいため、稲作には適さない。そのため、米に代わって作られていたものが、蕎麦である。蕎麦作りにとっては、平らな土地を要しないこと、水はけが良いこと、1日の大きな寒暖の差に加えて、吉野川の澄んだ水が入手しやすいことといった地理的条件や地質の全てがプラスに働く。そして、小麦粉等のつなぎを使わず、蕎麦粉100%の「祖谷蕎麦」や、「蕎麦米雑炊」といった祖谷地域の郷土料理が発展した⁶⁾。「蕎麦米雑炊」に使う蕎麦米は、そばの実を塩水でゆでて乾燥させ、殻を取り除いたものである。この蕎麦米を、だし汁の中入れ、煮ることで「蕎麦米雑炊」となる。これは、都落ちした平家の落人が、都にいた際に食べていた米を懐かしく思い、今手に入る食材で何とか米に似せた食べ物がないかと思案した結果、「蕎麦米雑炊」が食べられ始めたといわれている。

蕎麦の他に、この地域の特徴的な農産物にイモ類が挙げられる。「ごうしいも（ごうしゅいも）」と呼ばれる、じゃがいもに似た在来種のいもが育成されている⁷⁾。一般的な男爵イモよりも小さく、収量も5割ほどで、病気にも弱い品種であるにもかかわらず、標高がある急勾配のやせた畑に適しているため、この地域で作られ続けている。先の「蕎麦米雑炊」に入っているイモ類も、この「ごうしいも」である。また、こんにやく芋も作られ、この地域の名産のひとつに、こんにやくも挙げられている。さらに、大豆も作られ、「石豆腐（岩豆腐とも）」と呼ばれるこの地域名産の豆腐や、味噌も作られている⁸⁾。なお、「石豆腐」は固く作られた豆腐である。固く作られる理由として、上下動の激しい山道を歩くと、一般的な豆腐はつぶれてしまうことや、成形の際に失敗して貴重な大豆を無駄にしないよう、にがりや味増をたくさん入れたためだといわれている。この「石豆腐」や味噌を使った「でこまわし」という郷土料理がある⁹⁾。ごうしいも・石豆腐・こんにやくを串に刺し、みそを付けて、囲炉裏で回しながら焼く様子や形状が「でこ（人形）」に似ていることからそう名付けられたそうである。この地域で獲れるアユやアメゴ（この地域の方言である。アメゴのこと）と共に、囲炉裏等で焼かれることが多い。

また、この地域の郷土料理には「ひらら焼き」がある¹⁰⁾。「ひらら」とは方言で、「平たい石」の意味である。調理方法は、まず河原で大きく平らな石を見つけ、味噌を盛って土手を作る。そしてその土手の中に、アユやアメゴなどの川魚、野菜、「石豆腐」、こんにやくなどの食材と水を入れ煮る。しだいに水分が飛び、焼けるようになってくると食べ頃となる。「でこまわし」「ひらら焼き」はまさに、この地域の山の幸や川の幸をふんだんに使った、地産地消・土産土法の郷土料理といえる¹¹⁾。

2. 2. 落合集落

世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」のシンボルとなっているのが、奥祖谷に位置する落合集落である。この集落の道は細く曲がりくねっており、車の対向が極めて困難な道ばかりである。それでいて、集落内の高低差は390mあり、斜面は非常に急で、集落の下から上への移動は、車なしには困難である。インタビューした南敏治氏によると、この集落に住んでいるのは100人ほどで、子どもは中学生が2人だけであり、集落の平均年齢は65歳ほどのことであった。なお、インタビューできた別の住民によると、この地区の子どもは東祖谷小中学校に通うそうだが、併設されている認定こども園の園児も合わせても、通園・通学している子どもは70数名程度であるらしい。なお、三好市HPによると、2018年12月現在、東祖谷小中学校区の人口は1265名であるため、総人口に占める幼児・児童・生徒数を70名とすると、「子ども」の比率は5.5%となる。これは、2018年の総務省統計局による全国平均と比較すると4～6ポイント程度低く、つまり総人口に占める「子ども」の割合は、日本平均の半分程度となる。

この集落は重要伝統的建造物群保存地区にも指定されている。それは、江戸中期から昭和初期にかけて建てられた民家が残し、一つひとつ積み上げた石垣と畑などの光景に希少性があるとされたことが理由である。指定にあたっては、アメリカの東洋文化研究者であるアレックス・カー(1952年～)が尽力した。カーは、初めて落合集落を訪れた際に、自身の思い描いていた「桃源郷」によく似ていたことに感銘を受け、急斜面に作られた落合集落が持続可能であることを願った。しかし、落合集落は少子高齢化・過疎化を原因とする空き家問題に直面していた。つまり、持続可能性が失われていたのである。カーは、その対策として、重要伝統的建造物群保存地区の認定を目指すとともに、「桃源郷祖谷の山里」プロジェクトとして、空き家になった茅葺の住宅を改装し、宿泊施設とすることで、この集落の持続可能性を探った。

以上のように本章では、徳島県三好市祖谷地域及びそこに含まれる落合集落について概要を述べた。食料生産や食文化には、他地域との地理的なつながりが弱いゆえ、強い独自性が見られる。一方で、本地域は、山深い地域であることもあり、少子高齢化・過疎化が進んでいるといえる。

3. 現地調査

本章では、調査地として訪れた4か所、つまり、①道の駅大歩危、②歩危マート、③落合集落、④かずら橋夢舞台に分けて、調査結果を記す。なお調査は、2018年9月7日(金)から同9日(日)にかけて実施した。

3. 1. 道の駅大歩危

他の道の駅と比較すると、この道の駅は、販売されている地場産野菜の種類・量が少ないことが特徴的であった。「野菜コーナー」には三好市産のピーマン、きゅうり、ナス、イモ類が販売されていたが、少量しか販売されていなかった。世界農業遺産「阿蘇の草原の維持と持続的農業」及び「長良川の鮎」においては、それぞれ「阿蘇草原再生シール」「恵みの逸品」とのシールやロゴマークを使用することで、他の商品と差別化を図っていた¹²⁾。そこで、本世界農業遺産においても、そのような差別化が見られるか「世界農業遺産」のシールやロゴマーク等を探したが、それらの文字は見られなかった¹³⁾。加えて、農産物には「三好市産」と書かれているだけで、どの地域・地区で生産された野菜であるかの明記はなかった。駐車場には、大型バスを駐車できるため、道の駅の利用者は、地元の人だけでなく、観光客を想定し、土産物に注力していることが伺えるが、それを考慮に入れても、販売されている野菜は少量であった。

3. 2. 歩危マート

JR大歩危駅前に位置するスーパーマーケットが歩危マートである。歩危マートにおいても道の駅と同様で、地元産の野菜は少ししか置かれていなかった。また、小規模の店舗であるにもかかわらず、日配食品ばかりでなく、雑誌や日用品等を販売していた。山村地域の「よろずや」としての性質を有していた。

3. 3. 落合集落

調査の際は、見学のできる茅葺の長岡家住宅で、落合集落に住んでいる方2名と話すことができた。その方達に、世界農業遺産の調査に来た旨を伝えると、揃って「(集落の)上に住んでいる南さんが、この地区の世界農業遺産の中心的な役割を果たしている」との言葉が返ってきた。そのうちの1名から、「南さんと仲が良いので、電話して、今話できるか聞いてやろうか」との提案があったことで、南氏へのインタビューが実現した。

南氏は、この地区が世界農業遺産の認定を目指した理由を、農林水産省からの補助金の獲得が有利に働くからだと言っていた。氏によると、中山間地域で農業を行うと、農林水産省から補助金が得られる制度があるという。このことに関わって「重機が入ることのできない、落合集落での急斜面の農業を残したい」とも語っていた。

また、「落合集落には、世界農業遺産のことを悪く言う

者は1人もいない」とも語っていた。理由を尋ねると、認定前の生活と変わらず、同じことをするだけで、補助金を得やすくなり、そのことで地区の若者の定住化・子どもの増加が望めるから、とのことであった。この地区の少子高齢化・過疎化に対して危機感を持っていることが伺える。

さらに、南氏へのインタビューによって、「道の駅大歩危」や「歩危マート」にて、地元産の野菜があまり売られていない大きな理由が分かった。それは、氏の言葉を借りると、このあたりは「自給自足」であり、作った農作物やその加工品は、自分で消費したり、集落でお世話になっている人に渡したりしているから、という。JA等の集落の外部に「商品作物」として販売している人は「ほとんどいない」そうである。氏も、手作りしたこんにやくについて、「この前は50個程作ったが、お世話になった人に渡してしまって、手元に残ったのは3〜4個だった」という。

また、買い物の際の苦勞についても語っていた。買い物は、池田町まで片道約60kmもの道を、自動車を運転して向かうそうである。南氏は自動車を運転できるため、買い物に関しては距離が遠いこと以外に大きな問題はないが、自分で運転できないお年寄りにはさらなる問題もあると言う。そのようなお年寄りは、親戚や近くに住む人が買い物に出る際、一緒に乗せてもらうそうである。時間調整のわずらわしさや、申し訳なさを感じるといった問題が生じているそうだ。この地域には移動販売車が来るものの、住人は買い物に対し、不便を感じていると述べていた。

なお、落合集落の方に「世界農業遺産認定後、観光客は増えたか」と尋ねたところ、回答は「認定前と変わらない。2年前に放送された鉄腕ダッシュで、落合集落での流しうめん放送後は、観光客が増えた」とのことであった。

3. 4. かずら橋夢舞台

祖谷地域をはじめ県内の特産物や土産を販売している「物産館」、祖谷蕎麦や蕎麦米雑炊、徳島ラーメンといった郷土料理を食べることのできる「お食事処 かずら橋亭」、大型駐車場からなる、かずら橋夢舞台は、多くの観光客でにぎわっていた。観光名所のかずら橋まで徒歩3分程度と、この地域の観光の中心となっている。

ここでも、地元産の野菜は、少量しか販売されていなかった。

一方で、興味深い幟を発見した。「地産訪消」と書かれた幟である。地産地消の言葉は小学校社会科の教科書にも見られ、既に周知されている言葉であるが、「地産訪消」との言葉は一般的だといえない。地域外に住む者が「訪れ」「消」費することを願った、地産地消の概念から派生したものであると考えられる。産業に乏しく、人口が少ないがゆえに、見られるものであろう。なお、「地産訪消」の幟周辺で売られていたのは、タオルや帽子、かばんといった藍染め工芸品¹⁴⁾や祖谷蕎麦、祖谷こんにやくといった、食べ物以外や、比較的日持ちのする食べ物ばかりであった。地産地消という概念には、主に農産物や水産物を、その生産地近くで消費することが含まれる。祖谷のような過疎化

の進む地域では、消費を外部に求めなければ持続可能ではなくなってしまうということであろう。

3. 5. 調査結果の考察と教材化の視点の抽出

以上、4つの調査地について、調査結果を述べた。本研究の目的は、世界農業遺産のESD教材開発であるため、ESDを構成する3本柱と文化(図1に示す)の視点から、調査によって明らかになった調査結果を分析したい¹⁵⁾。つまり、社会・環境・経済・文化の4つの視点である。

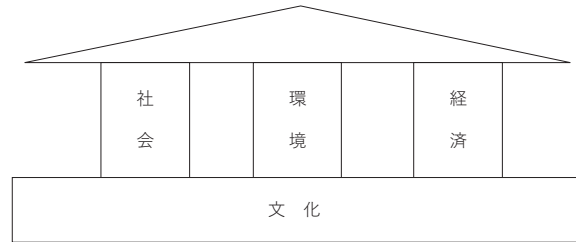


図1 ESDの3本柱とそれを支える文化

(出典：日本ホリスティック教育協会編 2008)

第1に、社会の視点である。社会とは広範に及ぶ概念ではあるが、本地域の特徴を鑑み、本稿では地域の持続可能性としたい。この地域は山間地であり、主な交通手段は車やバスとなる。しかしそのバスも、1日に4〜8本程度しか来ず、決してアクセスが良いとは言えない。その上、南氏によれば約60km離れた所へ買い物に行くなど、買い物ができる商店も少ない。さらに、通院やインフラ、さらには南氏も嘆いていた少子高齢化・過疎化を考慮に入れると、この地域の持続可能性は危機的状況であることが予想される。現に祖谷地域は、2010年に三好市によって実施された調査によると、全79集落のうち、存続集落が19、準限界集落が25、限界集落が35と、この地域の多くの集落で存続が危ぶまれている状況にあることが明らかになっている¹⁶⁾。

第2に、環境の視点から、調査結果を分析する。本地域は日本三大秘境のひとつとされているように、自然豊かなところにあり、環境が、破壊されている状況や、失われつつあるといった状況とは縁遠い。むしろ、少子高齢化・過疎化により管理者がいなくなることに由来する、放棄地の増加が懸念される。

第3は、経済の視点である。本地域では、南氏が言うように「自給自足」が多く見られることもあり、本地域における経済の循環は小さいといえる。しかし、地域の外へ買い物に行くことや、地域の持続可能性を鑑みると、外部との「つながり」も必要であることが分かる。それにもかかわらず、現地調査からは、販売されている農作物が少ないこと、さらに世界農業遺産認定後に観光客が増えていないことが明らかになっている。つまり、「つながり」があるのは、世界農業遺産や農業と関係のない観光客によって、藍染めの工芸品や日持ちのする郷土料理等を介してつながっているのであって、世界農業遺産を地域の持続性には

活用できていないのである。加えて、少子高齢化・過疎化に直面している本地域は、「若者」の定住者が増えるような、さらなる外部への働きかけが必要なのではないかと南氏が望む、助成金の増加も、この外部への働きかけの一部であるが、成果が出るには時間を要する。このことから、外部との「つながり」が少ない本地域は、地域の持続可能性について危険をはらんでいることが分かる。自給自足の概念自体は、輸送や過度な促成栽培等にかかるエネルギーを必要としないことで、確かに持続可能な社会のために非常に重要な概念ではある。しかしそれは、人的資源が確保されていることが前提である。人がいなくなれば、自給自足は成立しなくなる。

第4は、文化の視点である。この視点については、食料生産及び食文化に代表されるように、独自性に富んだ文化が今なお残っている。

このように検討すると、本地域は、「社会」と「経済」に課題を抱え、特に「社会」の課題が大きいため、現在は問題を抱えていない「環境」や「文化」にも、将来的に危機が及ぶ可能性があることが指摘できる。

なお、筆者はこれまで、世界農業遺産「トキと共生する佐渡の里山」と「清流長良川の鮎」の現地調査をおこなった。それらの調査結果を、先の ESD の 3 本柱と文化をフレームワークに設定し、「にし阿波の傾斜地農耕システム」との比較を表 1 に示す。このことから、本地域の持続可能性が危機的状況にあることが分かる。

以上から、本地域の特徴及び現地調査から抽出することのできた、ESD の視点からみる教育的意義とは、中心的な①地域の持続可能性と、それに付随する②他地域とのつながり、といえる。加えてこの 2 点は、教育内容として設定することができる。

4. 「にし阿波の傾斜地農耕システム」教材化の視点

本章では、第 1～3 章を踏まえ、「にし阿波の傾斜地農耕システム」の ESD 教材化における重要な要素の検討と、

授業開発に向けた理論的背景を検討したい。

4. 1. 「にし阿波の傾斜地農耕システム」における ESD 教材の重要な要素

世界農業遺産は有効な ESD 教材になり得ると冒頭で述べた。それは、世界農業遺産に、ESD で求められる「変化」「つながり」「多様性」の 3 つの重要な要素を含み、かつ、それらがバランス（調和）の取れた状態であるからであった。では、「にし阿波の傾斜地農耕システム」は、先の 3 つの重要な要素は含んでいるのか。また、それらはバランスが取れた状態なのか。「にし阿波の傾斜地農耕システム」が ESD 教材となり得るのか、検討したい。

まずは「変化」である。「変化」は落合集落をはじめとする、本地域の少子高齢化・過疎化、つまり時間軸による変化がこれに当たる。少子高齢化・過疎化に直面している現在の落合集落は、どのようにすればこの集落が持続可能なものとなるのか、本地域の持続可能性を考えることで、「変化」の要素を含む学習が可能である。これは、ESD の 3 本柱の「社会」と対応している。

次に「つながり」である。これは、ESD の 3 本柱の「経済」と対応し、他地域との「つながり」が弱いこと、そして「地産訪消」の幟を使って、他地域と「つながり」ろうとしている取り組みを扱った学習が考えられる。

そして、「多様性」であるが、本地域独自の食料生産の様子や、食文化等にみることができる。これらから、「多様性」の要素を含む学習ができる。

最後に、バランスについて検討する。本地域における「変化」「つながり」「多様性」の 3 つの要素は、互いに絡み合っていることが分かる。人口減少の問題が生じているため、他地域とのつながりが必要になり、他地域とつながるために、多様性に富む食料生産や食文化を活用することで、世界農業遺産の認定を目指し、現に認定された。そのような努力や工夫をすることで、人口減少に歯止めをかけようとしているのである。

以上から、①地域の持続可能性、②他地域とのつながり、③

表 1 世界農業遺産 3 サイトの比較

	トキと共生する佐渡の里山	清流長良川の鮎	にし阿波の傾斜地農耕システム
社会（地域の持続可能性）	離島ではあるものの、自然豊かで農業や漁業といった産業も盛んである。	名古屋という大商業圏にも近く、問題ない。	少子高齢化・過疎化が進み、危機的状況にある。
環境	豊かな環境がある。しかし、高齢化に直面している。	豊かな環境がある。しかし、緩やかに高齢化が進んでいる。	豊かな環境がある。しかし、高齢化に直面している。
経済（外部地域とのつながり）	農業や漁業に加え観光業も盛んなため、つながりがあり、経済の交流も盛んである。	名古屋という大商業圏にも近く、ブランド化を進めることで経済の活性化を進めている。	公共交通機関も少なく、販売している農産物も少ない等、つながりは弱い。
文化	能や金に関する独自性に富んだ文化	アユを使った独自性に富んだ文化	食文化に代表される独自性に富んだ文化
教育的意義・教育内容	・環境保全 ・農家の生計維持	・ブランド化	・集落の持続可能性 ・他地域とのつながり

（筆者作成）

食料生産・食文化を教育内容として設定することで、「にし阿波の傾斜地農耕システム」は有効なESD教材になり得ることがわかる。

4. 2. 授業開発における理論的背景

4. 1で明らかになった、①地域の持続可能性、②他地域とのつながり、③食料生産・食文化は、小学5年社会科「高い土地の暮らし」で扱うことができる。理由として、第1に、本単元は「人々は自然環境に適応して生活していること」の理解を学習指導要領は求めており¹⁷⁾、その例として、先の①地域の持続可能性、②他地域とのつながり、③食料生産・食文化を授業内で扱うことができること。第2に、東京書籍社が「山地の暮らし」の事例地として、東祖谷地区を採用しており、祖谷地域を直接的に取り扱うことができるためである¹⁸⁾。そこで、小学5年社会科「高い土地の暮らし」で、本地域を扱った授業を提案したい。

授業を開発するにあたり、2点の先行研究に触れる。1点目は、唐木清志の主張である¹⁹⁾。本地域における持続可能性は、人口減少の枠組みで捉えることができる。唐木は、人口減少社会における社会科授業の役割を述べている。そこで、唐木の論を援用した授業開発を行うこととする。

唐木は、「人口減少は、日本社会に暗い影を落とすことは否定できない」と、人口減少が続く社会に警鐘を鳴らす。その一方で、広井良則が提案する「定常型社会」を「やや楽観的とも言える」としながらも、「日本社会に課せられた一つの試練」を乗り越えることができれば「人口減少は新しい社会の創造」できる可能性があると紹介している。その試練とは、物質的な豊かさではなく、新しい豊かさを実現できる社会をイメージすることである。唐木の述べる新しい豊かさとは、「マテリアルな消費を増大させることなく成長を続ける社会、経済の量的拡大を基本的な価値ないし目標としない社会、変化しないものにも価値を置くことができる社会」であるという。

また、人口減少の対策のひとつに、社会科カリキュラムの見直しを提案している。具体的には、学年を超えて、「地域づくり学習」「くにづくり学習」「ともにいきる社会づくりの学習」と、「つくる」視点から内容を3つに組織している。「地域づくり学習」は、問題解決のプロセスを「つかむ」「調べる」「まとめる」で終始せず、「生かす」まで発展させる必要性を説く。「くにづくり学習」では、国単位で考える学習の必要性を説くが、具体的な学習過程等は見られなかった。「ともにいきる社会づくりの学習」では、社会参加学習（サービス・ラーニング）の発想を有する学習活動の必要性を説く。

加えて、人口減少を教材化する際に留意することとして、各種データから事実を読み取らせること、人口問題が様々な社会的課題の発生原因となっていることを児童生徒に正確に伝えることの2点を挙げている。

以上、世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」からみる教材化に援用できる唐木の主張を以下に要約することができる。

①物質的な豊かさのみではなく、「新しい豊かさ」を実現できる

社会をイメージできる授業とすること。

②本単元は「くにづくり学習」に対応していること。

③各種データから事実を読み取らせ、人口問題が様々な社会的課題の発生原因になっていることを児童に正確に伝えること。

先行研究の2点目は、辻英之が紹介する、少子高齢化・過疎化に頭を悩ませていた長野県下伊那郡泰阜村が、ESDによって地域創生に成功した例である²⁰⁾。ここで取り上げている泰阜村の状況、つまり、山間部に位置すること、交通の条件が悪いこと、少子高齢化・過疎化に直面していること、その村独自の文化があること、が、祖谷地域と酷似しているため、取り上げることとする。

地域創生に成功した一番の理由は、泰阜村のある村民の言葉に集約できる。それは、「わしは、この村の子どもたちに、この村の良いことを何にも教えてこなかった。だからわしは、生まれ変わったら教師になって、この村の良いところをたくさん教えたい²¹⁾」との言葉である。唐木が言う、「物質的な豊かさではなく、新しい豊かさ」とも重なるが、村民にとって自明のこととなっていた、「不便だからこそ生み出す喜び」や「生きる知恵」に焦点を当てることで、地域に愛着を持つことができ、それを伝えることで他地域に「ファン」ができ、その「ファン」によって地域は活性化する事例が紹介されていた。

以上、唐木の主張と、辻の報告を検討した上で、唐木の主張に対し、3点指摘したい。第1は、「くにづくり学習」に対し、具体的な言及がないことである。第2は、中学校における実践事例を示しているが、小学校における実践事例を示していないことである。第3は、「新しい豊かさ」を授業内でどのように扱うか提言されていないことである。紹介されている中学校における実践事例においても同様に、「新しい豊かさ」の位置付けが見えない。

以上から、本稿においては、「くにづくり学習」として「新しい豊かさ」を顕在化させた小学校第5学年単元「高地の暮らし」を提案したい。

5. 小学校第5学年単元「高地の暮らし」の単元開発

5. 1. 単元目標

○祖谷地域における生活・食料生産・産業・人口について資料から読み取ることを通して、人々は地理的条件に順応して生活していること、しかし少子高齢化・過疎化に直面し、それは社会的課題の発生原因になっていることを理解することができる。【知識・技能】

○地理的条件と人々の生活や産業を関連づけて、人々の生活は地理的条件に順応していることを考えることに加え、祖谷地域の良さを表現することができる。

【思考・判断・表現等】

○意欲的に学習に学習しようとするとともに、学んだことをもとに、近くの限界集落の持続可能性及び良さと、その克服方法を考えることができる。

【主体的に学びに向かう態度】

5. 2. 単元の展開

単元の展開

時	主な学習活動	指導上の留意点	資料	評価
1	①資料から祖谷地域の特徴を把握する。 ②この地域に住む人の暮らしぶりを想像させ、学習問題を考える。	・山間地域で、標高が高く、坂が急で、道が細く、交通の便が悪いという特徴を把握させる。 ・自分の生活と比べることで、学習問題に辿り着きやすくなるようにする。	・Google earth の衛星写真 ・祖谷地域の等高線 ・車道の写真・バス時刻表 ・店まで 60km の南氏の話 ・移動販売車の写真 ・ひらら焼きの写真	適切な学習問題をつくることができる。
学習問題：この地域の人たちはどんな生活をしているのだろうか。				
2・3	①交通に関する苦勞とその克服について考える。 ②産業に関する苦勞とその克服について考える。 ③食料生産に関する苦勞とその克服について考える。 ④人口減少に関する苦勞とその克服について考える。	・交通網が発達していないことに気付かせ、車の運転や、近所の人の運転で買い出しに行くか、移動販売車を利用して、地理的条件による交通面の困難を乗り越えようとしていることに気付くようにする。 ・加えて、農産物等はあまり販売されておらず、他地域とのつながりが弱いこともおさえておく。 ・苦勞して食料生産しているが、他に主だった産業がないことに気付かせ、どうしても乗り越えづらい問題があること、他地域とのつながりが弱いことに気付くようにする。 ・食料生産が困難であることに気付かせ、2章で述べた、野菜が栽培されるようになった地理的条件やエピソード、食文化も伝え、食料生産及び食文化は地理的条件と密接に関係しており、その苦勞を乗り越えた努力に、児童が気付けるようにする。 ・現在、祖谷地域は少子高齢化・過疎化に直面していることに気付かせ、その問題は多方面に及び、この問題の克服が今目的で喫緊の課題になっていることに気付かせる。	・バスの時刻表 ・地図帳 ・店まで 60km の南氏の話 ・移動販売車の写真 ・道の駅の写真 ・Google earth の衛星写真やストリートビュー ・急斜面の畑の写真。 ・祖谷蕎麦、蕎麦米雑炊、ごうしいも、石豆腐、でこまわし、ひらら焼きの写真。 ・「三好市限界集落調査に関する調査報告書」内の「高齢化率」、限界集落を示した「集落状況」	人々は地理的条件に順応して生活していること及び少子高齢化・過疎化に直面していることを理解できる。
4	①泰阜村が地域創生に成功した事例を知る。 ②上の学習問題で話し合う。	・村民が自明視していた「新しい豊かさ」を地域外の人に伝えたことによるという。 ・「ここのしかない食べ物」「他地域では見られない景観」「不便だからこそその人々のつながり」といった「新しい豊かさ」に着目できるようにする。	・村民の話 ・これまでの授業で使用した資料	既習事項を踏まえ表現できる。
祖谷地域の良さは何だろうか。				
5	①上の学習問題で話し合う。	・自分の住む県内等、近隣の過疎に直面している地域に着目し、その地域がもつ良さと、その地域とつながる方法を考えさせる。	・地域独自の文化や、地理的特徴に順応している人々の暮らしがわかるもの。	持続可能性と克服方法を考えることができる。
過疎に悩んでいる地域の良さを調べ、そことつながる方法を考えよう。				

6. おわりに

本研究の成果を3点と、課題を2点挙げたい。

成果の第1は、本基盤研究(C)「世界農業遺産のESD教材開発を通じたESDの視点に関する研究」の課題であった、新たな事例地を現地調査し、教材化の視点を抽出し、教材を提案できたことである。第2に、本事例地から抽出できた視点は、従来の視点とは異なっていたため、「新しい豊かさ」という新たな視点を示し、教材を提案できたことである。第3に、ESDで求められる3本柱である「社会」「経済」「環境」と「文化」を包括的に取り扱うことのできる小学校第5学年社会科単元「高地のくらし」を開発できたことである。

特に筆者が強調したいことは成果の第2であるため、その意義について考察を加える。

まず、「新しい豊かさ」に焦点を当てた学習は、祖谷地域のみではなく、他地域においても一般化可能であることである。日本には、祖谷地域以外にも、少子高齢化・過疎化に直面している地域が多数ある。そのような地域が活性化を目指す際、必要となってくるのが「新しい豊かさ」の概念であろう。「新しい豊かさ」を顕在化させる学習を組み込む意義は、地域の、ひいては「くに」の活性化にある。

次に、単元の最後に、自分の身近にある、少子高齢化・過疎化に直面している地域における「新しい豊かさ」及びその発信方法を考える学習を取り入れることである。これは、小学4年生で学習する、自分が住んでいる(都道府)県の学習との接続を意識したものであり、社会認識形成に終始せず、公民的資質の育成を狙ったものでもある。

そして、詳しく述べられていなかった「くにづくり学習」の具体を、小学校段階における授業で示したことである。

一方、課題の第1は、現地調査によるインタビューが、南氏を中心とした地域の住人のみであった点である。世界農業遺産の認定に尽力したと思われる行政の立場の人にもインタビューをする必要があったのではないか。

課題の第2は、現地調査ができたのは、祖谷地域及び落合集落のみであることである。世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」は、美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町・徳島県によって、世界農業遺産の認定を目指してきた。つまり、「にし阿波」とは、広範に及ぶ地域であったが、シンボル及び中心的となる地域や集落のみの限定的にしか調査ができていない可能性がある。

なお、世界農業遺産認定は2018年3月であり、現地調査で訪れたのは同年9月と、認定後、比較的短時間での訪問であった。訪問後も、2018年10月にはロゴマークの募集²²⁾や、11月には世界農業遺産を知らせる幟を活用したPR活動²³⁾が行われるなど、現地調査では見られなかった活動が、今後活発に行われる可能性がある。

未調査地の現地調査の際は複数のステークホルダーにインタビューするとともに、今後の「にし阿波の傾斜地農耕システム」の動向にも着目して、教材開発を進めていきたい。

謝辞

現地調査にあたり、徳島県三好市東祖谷落合集落にお住まいの南敏治氏をはじめとした、多くの方々にお世話になりました。末筆ながら、感謝申し上げます。

注

- 1) 祐岡武志・中澤静男・大西浩明・山方貴順「世界農業遺産のESD教材開発の視点—世界農業遺産『能登』と『阿蘇』を事例に—」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』2巻、2016、pp.117-126
- 2) 大西浩明・山方貴順・祐岡武志・山下欣浩・中澤静男「豊かさに焦点を当てた持続可能な社会の創り手を育成する社会科—小学校5年生社会科「これからの食料生産」を題材に—」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』4巻、2018、pp.35-44
- 3) 山方貴順・中澤静男・大西浩明・祐岡武志「ブランド化に着目した世界農業遺産の単元開発—世界農業遺産「清流長良川の鮎」を事例として—」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』4巻、2018、pp.103-111
- 4) 調査済みであるのは、以下の6サイトである。新潟県佐渡市「トキと共生する佐渡の里山」・石川県能登地域「能登の里山里海」・熊本県阿蘇地域「阿蘇の草原の維持と持続的農業」・大分県国東半島宇佐地域「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」・岐阜県長良川上中流域「清流長良川の鮎」未調査であるのは、以下の5サイトである。静岡県掛川周辺地域「静岡の茶草場農法」・和歌山県みなべ・田辺地域「みなべ・田辺の梅システム」・宮崎県高千穂郷椎葉山地域「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」・宮城県大崎地域「『大崎耕土』の巧みな水管理による水田システム」・静岡県おさび栽培地域「静岡水わさびの伝統栽培」・徳島県にし阿波地域「にし阿波の傾斜地農耕システム」
- 5) 南氏のインタビューによる。
- 6) 三好市役所観光課『秘境とりっぶ 三好市ドライブマップ』や、徳島県観光政策課『徳島じゃらん』、徳島県観光政策課『たべたび徳島』に詳しい。
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 同上
- 10) 同上
- 11) 湯本貴和は「『地産地消』、『旬産旬消』、『土産土法』という三つの要素がそろえば鬼に金棒ではないか、と私は考えている。できれば、これを食育の基本としたいものである。」と、食料生産が持続可能となるために、消費者としての望ましい考え方を提案している。湯本貴和編『食卓から地球環境がみえる—食

- と農の持続可能性』2008、昭和堂、p.153
- 12) 前掲1) 2)
 - 13) 現地調査に訪れた際には見られなかったが、下記HPによると、PR活動として11月4日～25日までの期間、幟を設置していることが伺えるため、調査日以降には、このような動きは拡大される可能性はある。徳島剣山世界農業遺産推進協議会「世界農業遺産『にし阿波の傾斜地農耕システム』をPRするのぼり旗を設置しております！」<<https://giahs-tokushima.jp/blog/put-up-an-advertisement-flag>> 2018年11月24日アクセス
 - 14) 徳島県観光政策課『徳島じゃらん』によると、阿波藍と呼ばれる、藍染めの原料となる菜は、「江戸時代後期には既に全国市場を席捲していた」とあるほど、徳島県では藍染めが名産である。
 - 15) 永田佳之「持続可能な未来への学び—ESDとは何か—」五島敦子・関口知子編『未来をつくる教育ESD—持続可能な多文化社会を目指して』2010、明石書店、pp.100-103
 - 16) 三好市企画財政部企画調整課「三好市限界集落調査に関する調査報告書」<https://www.miyoshi.i-tokushima.jp/fs/2/0/5/4/0/_/dwn1.pdf#search=%EF%BC%88%E4%B8%89%E5%A5%BD%E5%B8%82%E4%BC%81%E7%94%BB%E8%B2%A1%E6%94%BF%E9%83%A8%E4%BC%81%E7%94%BB%E8%AA%BF%E6%95%B4%E8%AA%B2%E3%80%8C%E4%B8%89%E5%A5%BD%E5%B8%82%E9%99%90%E7%95%8C%E9%9B%86%E8%90%BD%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E8%AA%BF%E6%9F%B%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%E3%80%8D%EF%BC%89> 2018年11月21日アクセス
 - 17) 文部科学省『小学校学習指導要領社会編』、2017、p.73
 - 18) 北俊夫、小原友行、吉田伸之他『新編新しい社会5年上』2014、東京書籍
 - 19) 唐木清志「人口減少社会における社会科の役割—「社会的課題」「見方や考え方」「協働学習」の可能性—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.125、2015
 - 20) 辻英之「教育立村—国道も信号もコンビニもない「絶望的な山村」の挑戦」阿部治編『ESDの地域創生力 持続可能な社会づくり・人づくり9つの実践』合同出版、2017
 - 21) 同上、p.140
 - 22) 徳島剣山世界農業遺産推進協議会「『にし阿波の傾斜地農耕システム』シンボルマークのデザイン募集！！」<<https://giahs-tokushima.jp/bosyu/logomark2018>> 2018年11月26日アクセス
 - 23) 前掲13)

参考文献

- 大内力 (1990), 『農業の基本的価値』, 家の光協会
- 生源寺眞一 (2010), 『農業がわかると, 社会のしくみが見えてくる: 高校生からの食と農の経済学入門』, 家の光協会
- 岸本喜樹朗・斎藤修編 (2011), 『地域ブランドづくりと地域のブランド化』, 農林統計出版
- ポール・ロバーツ, 神保哲生訳 (2012) 『食の終焉』, ダイヤモンド社
- 生源寺眞一 (2013), 『農業と人間 食と農の未来を考える』, 岩波現代全書